

史料整理を通じて得た 新たな父のイメージ 今井武夫関係文書整理 現状と今後

平成25年1月26日
於 愛知大学 名古屋校舎
今井貞夫(今井武夫 三男)

内容

1. 今井武夫 略歴年表.....	1
2. 自宅に遺された史料内容.....	2
3. 終戦後の今井武夫 エピソード.....	3
4. 新たな父 今井武夫像.....	4
5. 父の思い出 史料整理を通じて 感じたこと 今後.....	5
6. 述懐(汪兆銘 について).....	5
7. 最後に.....	7
参考 「その時 今井武夫は」.....	8
(1) 盧溝橋事件時の停戦交渉.....	8
(2) 日中和平工作.....	8

1. 今井武夫 略歴年表

明治31年	2月23日	長野県 上水内郡 朝陽村 大字北長池(現 長野市)の自作農の父 今井熊太郎(46歳)と母 さく(36歳)の四男として誕生 6人姉妹の末子として誕生
		長野の今井家 初代(今井四郎左エ門貞尚)は 1622年(元和8年)広島から 信州(信濃国)高井郡高井野村(長野県上高井郡小布施町 高山村堀之内)に移封された 福島正則に随従 父 今井熊太郎は 今井家14代当主 今井家当主は 朝陽村の名主を務める家柄
	34年	4月15日 母 今井さく(佐治木家 出身) 死去 13歳半年上の長姉(今井せい)が母親代わりで育てる
	43年	3月 長野県 上水内郡 朝陽尋常小学校 卒業(教育制度改正により 小学校六年制 初の卒業生)
大正	4年	3月14日 長野県立 長野中学校 卒業(15回生)成績89人中8番 2番目の若さ(卒業生 成績表)
	4年	3月 陸軍士官学校 召募試験に合格(長野中学同期入学は 栗林忠道の弟 砲兵科 栗林熊尾 当時 入隊まで 8ヶ月間ブランク)
	4年	4月 長野県 上水内郡 曹洞宗石田山長秀院に下宿し 参禅しながら 神郷尋常高等小学校の代用教員(小学 2年生に授業 約半年)
	4年	12月 原隊 富山歩兵第69連隊に入隊(半年後 今井たち中学校出身陸軍士官候補生に 幼年学校出身候補生 合流)
	5年	12月 1日 市ヶ谷台の陸軍士官学校 入校(全国の士官候補生 集合) 陸軍軍曹 第3中隊第3区隊に所属 区隊長 岡田資歩兵中尉(後中将 映画「明日への遺産」の主人公)
	7年	5月27日 陸軍士官学校 卒業(30期生)成績 630名中46番(卒業生 成績表)
	7年	12月25日 富山歩兵第69連隊付 見習い士官を経て 陸軍歩兵少尉
	9年	4月12日 帝国在郷軍人会(田中義一内閣が創立) 長野県上水内郡朝陽村分会 特別会員
	10年	4月24日~11年 7月24日(金沢 第9師団隷下 69連隊) シベリア出兵
	11年	3月 6日 陸軍歩兵中尉(シベリア出兵中に昇級)
	14年	5月 1日 宇垣軍縮 原隊 富山歩兵第69連隊 廃止 日本軍最北端 朝鮮会寧歩兵第75連隊付(原隊)
	14年	8月 7日 陸軍士官学校 予科生徒隊附(陸士41期生 対象)予科第3中隊 第4区隊長 区隊長 26名中に(「二・二六事件」首謀者の一人)栗原安秀候補生(後 中尉)がいた
	14年	12月26日 陸軍大学校 合格
	15年	1月 7日 富山県東砺波郡井波町 太田きみ子(富山県 高岡高等女学校卒 19歳)と結婚(今井武夫28歳)
昭和	2年	7月26日 陸軍歩兵大尉
	3年	12月12日 陸軍大学校 卒業(40期生 卒業生 合計 47名 徽章 「天保銭」)朝鮮会寧歩兵第75連隊勤務
	6年	3月12日 参謀本部員(第二部 支那課 支那班員)
	6年	12月12日 ~ 8年10月25日 参謀本部付仰付(支那班 中国研究員) この間中国 各地を廻る
	8年	8月 1日 陸軍歩兵少佐
	10年	12月 2日 中国在勤(北平) 帝国大使館付 駐在武官輔佐官(通称 「北京武官」)
	12年	8月 2日 陸軍歩兵中佐
	12年	11月 9日 参謀本部 第二部(情報) 支那課 支那班長
	14年	3月 9日 陸軍歩兵大佐 参謀本部 支那課長
	14年	9月12日 支那派遣軍総司令部 参謀 第二課長(情報)兼 第四(政務)課長
	16年	8月 1日 西部63部隊長 その後 福山編成 歩兵第141連隊長

16年12月30日 台湾 高尾から フィリピンへ出征 **バター攻略戦**
 18年 3月 1日 **陸軍少将 大東亜省 官房審議室参事官** (初代 大東亜大臣 長野中学先輩 青木一男)
 18年 7月26日 三男 **今井貞夫 誕生** 於 東京都目黒 (今井武夫 45歳 閣下と呼ばれることになってからの子ども)
 19年 9月 4日 **支那派遣軍 総参謀副長 兼 中国在勤 帝国大使館付 駐在武官** (南京)
 20年 8月30日 於 敗戦後の南京 **渉外部長** (事務所は 旧日本大使館内) 終戦後 **南京残留 南京総連絡班長**
 戦犯として起訴された同僚・軍人への援助活動
 22年 1月 4日 佐世保港 上陸 **復員** 予備役編入 (最終帰国船に溥傑の妻 流転の王妃 愛新覚羅浩 偽名で同船)
 39年 6月 外務省 外郭団体 「善隣友誼会」(日中戦争時代 対日協力者 困窮救済団体) 理事
 57年 6月12日 **死去 (享年 84)** 法名「最勝院釈武徳」(浄土真宗 西本願寺 門徒) 墓は多磨霊園14区所在 正五位 勲二等 瑞宝賞

2. 自宅に遺された史料内容

本人が生前公表を意図した目的かどうか分からない**今井武夫史料** 合計 約5千点

昭和19年3月 富山県東砺波郡井波町の母の実家に東京から今井武夫史料を移す 富山市は空襲を受けたが井波町は無事 消失せず
 何故 今井武夫がこれだけ多くの史料を遺したかの明確な理由 不明

歴史の証言? 参考資料として? 自己の弁明史料? 人柄? (メモ好き?)

史料の存在を 父は公言せず 息子の私にも伝えず

父の死後も 父を敬愛していた母 今井きみ子 13歳年上の長姉 今井俊子 史料を大切に保存

私は大学卒業後に史料の存在を知ったが その内容 歴史的価値 詳しくは知らず 姉から聞く

10年前 東京大学名誉教授 伊藤隆先生と私の出会い 姉と相談 史料の委託と整理開始

今井武夫史料と長姉 今井俊子の思い出を参考に 父の伝記を作成

史料整理の成果

「**近現代史料 今井武夫関係文書目録 10**」(近代日本史料研究会 代表 伊藤隆東大名誉教授) 平成19年8月発行
今井貞夫著 『幻の日中平和工作 軍人今井武夫の生涯』(中央公論事業出版社) 平成19年11月発行

史料内容は 玉石混合

今後 『今井武夫日記』(みすず書房予定) 刊行後 国立国会図書館に寄託予定

史料の公開は 国立国会図書館に寄託契約後(本年3月以降) 但し 日記の公開は 『今井武夫日記』(みすず書房予定) 刊行後予定

主な一次史料:

☆日記 (3年・4年・7年・8年・12年7月~16年 終戦後 晩年におよぶ)

- 昭和3年1月 陸軍大学校時代(東京) から 翌4年4月歩兵75連隊(北朝鮮会寧) 勤務時代までの日記
- 盧溝橋事件一週間前の昭和12年の7月1日から「北支事変手記」として始まり、昭和16年8月15日まで続けられた四年間・4冊にわたる日記
- 戦後の南京総連絡班時代の日記
- 復員後の昭和22年1月から26年1月までの間の日記(富山、東京)(途中隔絶期間あり)
- 昭和36年4月から55年3月までの間の日記(東京)(途中隔絶期間あり)

☆手紙 (岡村次大将 河辺正三大将 影佐禎昭中将 犬養健などから今井宛、中国研究員時代の今井から留守宅の妻きみ子宛 等)

- 昭和3年8月から結婚後の2年間半の単身赴任中、妻きみ子宛に出された 200通近くの手紙 内訳:

昭和3年8月 陸大生時代から4年3月の朝鮮歩兵75連隊勤務時代まで7ヶ月間	28通
昭和6年12月末から昭和8年6月参謀本部附中国研究員時代中国勤務(北平、天津、上海、広東など)18ヶ月間	142通
昭和8年7月から11月満州奉天特務機関員兼務時代 5ヶ月間	21通
この間 義父太田長蔵と幼子(6歳)の長男今井宏宛	10通
- 昭和12年7月10日 妻 今井きみ子宛 **遺書**(昭和16年12月24日付 上書) 今井武夫唯一の遺書 (後述8頁参照)
- 陸軍の先輩(畑俊六元帥、土肥原賢二、河辺正三、岡村寧次大将、磯谷廉介、松井太久郎、牟田口廉也 影佐禎昭中将など)・同僚・後輩(渡辺三郎少将 井本熊男大佐)などからの 今井宛の手紙
- 寺平忠輔(北平特務機関補佐)、松山芳政(河辺正三の副官)など 盧溝橋事件関係者からの証言の戦後の手紙
- 自著の『支那事変の回想』(みすず書房、昭和39年) 『近代の戦争 5 中国との戦い』(人物往来社、昭和41年) 『昭和の謀略』(原書房、昭和42年) 出版した際の 関係当事者の**意見・コメント集**
- 今井武夫宛 戦後の年賀状 河辺正三 村上知行(北京武官時代の読売新聞記者 戦後は作家) 苗剣秋 など

☆証言記録 テープ レコード 新聞記事

- 大正 7 年 陸軍士官学校卒業生（30 期）の 兵科ごとの成績氏名順番表と所属原隊 中学出身か幼年学校出身かの区別
- 宇垣軍縮による 大正 14 年 5 月 富山歩兵第 69 連隊将校団「解隊記念」冊子
- 北京武官秘密報告書 今井武夫
- 昭和 12 年 北平駐在武官時代に参謀総長に提出した「盧溝橋事件前後の中国情勢」に関する陸軍野紙に記載された秘密報告書
合計 23 件
- 昭和 12 年 10 月 25 日付け 北平陸軍機関職務業務分担表
- 昭和 13 年から 14 年にかけての 参謀本部 支那班長時代（東京）の「汪兆銘工作」に関する一連資料 この中には 添付資料を入れると全 27 枚からなる昭和 14 年 1 月 1 日付け興亜院会議決定「中央政府指導要領」を含む
- 昭和 13 年～15 年にかけて 日本政府が発行した今井武夫の「佐藤正」名義の偽名パスポート 3 通
- 昭和 13 年 1 月から昭和 14 年 1 月まで 4 回にわたって報告した 汪兆銘工作概況「渡辺工作の現況」（一号から四号まで四冊）（注：汪兆銘を重慶から出馬させた高宗武のことを「渡辺四郎」と称した）
- 同上「渡辺工作の現況」第四号で概略のみ報告された、汪兆銘の重慶脱出に関する 昭和 13 年 12 月から 翌 14 年 1 月までにわたる中国新聞各社の「報道・論評記事」の切抜記事 261 点
- 和平工作資料の簿冊
- 昭和 14 年 1 月 吉田東祐から今井宛の報告書「吉田、姜豪との和平交渉経過」
- 昭和 15 年 4 月 30 日汪兆銘から手交された汪兆銘署名 2 冊の詩集「雙照樓詩詞藁」と「掃葉集」 後者はすべて手書き
- 昭和 15 年度板垣征四郎日記（靖国偕行文庫所蔵）に記載されている今井との会合概要資料（桐工作関連部分）
- 昭和 15 年支那派遣軍参謀時代（南京）に行った重慶政権との「桐工作」に関する一連資料 簿冊
- 昭和 16 年 2 月記載の「皇紀二千六百一年紀元節 日中和平交渉ノ真相」（戦後の自著『支那事変の回想』の原資料となったもの）
- 呉佩孚・余漢謀・スチュアートなどとの日中和平工作資料
- 連隊長を務めた第 141 連隊軍旗の 宮中で昭和天皇からの拝受から 福山市の奉安までを記載した昭和 16 年の簿冊
- 歩兵第 141 連隊のフィリピンのバターン攻略戦を記した昭和 16 年 1 月 8 日から 17 年 5 月 2 日までの全 19 冊にわたる「戦闘詳報」・「行動詳報」の簿冊
- 昭和 17 年 3 月 台湾放送協会作成の現地録音 「南方攻略戦記 馬來編・比島編」 SPレコード 10 枚
- 大東亜省参事官時代の、昭和 18 年 4 月、昭和 19 年 1 月と 6 月の 3 回にわたる大東亜圏諸国への出張旅行記録の簿冊
特に青木大東亜大臣と一緒にいったときのタイ（ピブン首相）との 血盟関係締結準備資料 タイ情勢、ビルマ情勢（バモ首相）の分析資料
- 昭和 20 年 8 月 終戦処理の簿冊（含 湖南省芷江予備会談、調印式、南京連絡班状況報告）
- 昭和 23 年 7 月 29 日に 国立病院で 影佐偵昭中将から手交された「曾走路我記」オリジナル（訂正・加筆あるもの）
- 昭和 37 年 今井武夫「堀場一雄『支那事変戦争指導史』に対する所見」（批判文）
- 昭和 44 年 1 月から 48 年 1 月迄 東京の「中央月島新聞」に連載した随筆 47 件 及び未発見随筆も含めた自筆原稿
- 昭和 44 年 7 月 北京で盧溝橋事件をともに体験した軍人（河辺正三、牟田口廉也たち）や朝日・読売・毎日等新聞記者たちとの交流会「北京晩會」に寄稿した「盧溝橋事件について」
- 昭和 44 年と昭和 46 年 読売新聞社『昭和史の天皇』取材班による今井武夫録音取材テープ（劣化している）
- 昭和 51 年 1 月に創刊された季刊図書 『劇と新小説』（新小説社） 昭和 53 年 5 月の第 11 号までに今井が毎回寄稿した随筆のうち、特に初期のもの（第 1 号から第 5 号までの随筆記載 国立国会図書館に在庫なし）
- 昭和 52 年 2 月 今井自ら作成し 当時生存した連隊の部下に配布の フィリピン バターン戦の回想記録冊子「夏友会 戦史 元第六五旅団 歩兵第 141 連隊」（私家版）

☆暗号表（略語表） 昭和 14 年～15 年 3 通 「汪兆銘工作」「桐工作」用

☆名刺 今井が北京武官時代に面接した邦人 中国人たちなどの名刺を含め 全 約 1500 枚

☆写真 大正 11 年 富山歩兵 69 連隊旗手として シベリア出兵したときの 写真集「第九師団西伯利派遣記念写真帖」
冀東政権 1 周年記念誌 など 愛知大学広中一成君 今井武夫関連写真集 発行予定（彩流社）

☆絵葉書 大正 10 年以降のもの 100 年前の日本 朝鮮のものなど 62 枚

☆地図 江戸時代の日本 日中戦争前後の中国 バターン攻略戦前後のフィリピン地図など 119 枚

3. 終戦後の今井武夫 エピソード

参考：「幻の日中和平工作を執筆して 今井貞夫インタビュー」中国 21 V o 1. 31 特集：帝国の周辺 対日協力政権・植民地・同盟国『中国 21』（東方書店 平成 21 年 5 月）

昭和 20 年（8 月 15 日）ポツダム宣言受諾と戦争終結の玉音放送

南京で岡村寧次総司令官以下による支那派遣軍幕僚会議で投降・武装解除決定（承諾必謹）

（8 月 21 日～23 日）重慶政府との連絡のため 於 湖南省芷江 終戦予備会談

（8 月 29 日）終戦直後 南京残留の今井から 妻きみ子宛手紙

「大変なことになった 内地では随分混乱もあり 軍人家族に対する見方も変わり 処世も困難も多いと思う 我々個人としては努めるべき事を欠いたり すべからざることを為したりしたことはない事は当然で 大道を闊歩すべき者ゆえ 心無きものが縦令どのようなことを陰口しようと 聊かも卑属に流れず 内に矜持を蔵して 子供たちを生育してもらいたい 自分は元気で最後のご奉公と思って昼夜を分かたず奔走していることを子供たちにも知らせてくれ これからは信書を入手し難いのみならず こちらからも出せない 何度も言う事だが身体だけは大切にしてくれ・・・」

(9月 9日) 支那派遣軍 南京受降調印式 何応欽総司令認定 ”非戦犯第一号”

南京残留 南京総連絡班長 戦犯として起訴された同僚・軍人への援助

中国政府と 105万人陸軍軍人など210万人の在留邦人の中国大陸からの引揚げ交渉とその促進
それまでの和平工作を通じて培った中国側要人との信頼関係で 比較的速やかに交渉がまとまった
今井は ポツダム中将 武装解除後 南京で今井の軍刀人気

昭和21年(10月30日) 国民党秦徳純国防部長 南京の今井を訪問 紫檀のステッキ共有 国境を越えた友情例

昭和22年(1月 4日) 佐世保に帰国 復員 予備役

(1月29日) 内地帰還後 復員局への報告

昭和27年(3月14日) パージ(軍人の公職追放) 解除

今井は、妻きみ子との間に 5人(3男 2女)の子供を得る。子煩悩だったが、昭和10年長男(宏)(私が会ったことがない 15歳上の長兄)は小学校に入る6歳、昭和27年次男(信夫)は麻布高校2年17歳のときに、ともに病死。ある日突然の夭折(くも膜下出血死)後、昭和29年度と30年度の2年間、次女(孝子)と三男(貞夫)が通っている東京都中野区立塔山小学校のPTA会長を務めたPTA会長の期間中、今井は、他の中野区立小学校に先駆け、塔山小学校に水泳プールを開設するよう運動し、実現させた。この塔山小学校の水泳プール開設式には、水泳1500メートル自由形世界記録保持者だった古橋広之進を招き、盛大に行っている この間貞夫の小学5年生 学年の修学旅行 バス事故などあり 適切に処理

著述活動 昭和16年 2月「皇紀二千六百一年紀元節 日支和平交渉ノ真相」(未公開)
昭和38年 3月「日華事変の回想」(上)(下)(防衛庁 稲葉正夫からの依託執筆)
昭和39年 9月『支那事変の回想』(みすず書房) 刊行
昭和41年 3月『近代の戦争 5 中国との戦い』(人物往来社)
昭和42年 7月『昭和の謀略』(原書房)

今井は 新聞等で日中戦争(戦前)に関する新資料発見などニュースを聞いた場合は 新聞切り抜きなどをして史料として保存

昭和39年(6月) 善隣友誼会 理事(戦前 対日協力した日本亡命中国人困窮者救済活動)

昭和56年(10月21日) 桜美林大学勤務の次女 孝子(次姉)の病死 父 今井武夫 ショック

昭和57年(6月12日) 今井武夫 死去 享年 84

死床の病院で今井武夫が語った 郷里長野への想い入れ

法名 「最勝院釈武徳」 墓地は府中の多磨霊園 正五位勲二等瑞宝賞

浄土真宗 西本願寺により 永代供養される(門徒信者の今井武夫と 大谷光瑞 光照 光乗 光真師等との付合い)

昭和61年(3月10日) 妻 今井きみ子 死去 享年79 妻の口癖「お父さん(武夫)のもとに早く行きたい」

平成21年(9月 4日) 国民党 故 何応欽將軍(昭和62年9月没 97歳)の長女 何麗珠と今井長女俊子と三男貞夫が今井の地・長野市で初めて対面 両遺族 涙ぐんで喜び合い 和を希求した父たちの思い出を語り合う

平成24年(4月16日) 長野の民間有志「人間栗林忠道 今井武夫 顕彰会」 於 長野市松代 明德寺境内に顕彰碑建立 除幕式 顕彰会碑 裏面に「この心 己に刻む 末長く 学び伝えて 平和築かむ」

4. 新たな父 今井武夫像

3歳で母と死別 13歳半年上の長姉(今井せい)に育てられる

母の顔も知らず 母なるものの存在を知らず 小学校まで育つ

17歳の時 禅寺での下宿と小学校代用教員経験 → 神仏を敬う 教職と僧職への憧れ

昭和7年～8年 単身赴任の中国研究員時代 中国から出した父の 毎週1～2回の妻きみ子宛 及び 幼い長男宛てカタカナの手紙の手紙 骨肉愛(合計約200通の手紙) 今井武夫は子煩悩であった

昭和10年(7月19日) 可愛がっていた長男宏の夭死(6歳 白血病)のショックと影響

長兄宏がベッドに遺した訣別の言葉 「オセワニナリマシタ」

それまで血気壮んな将校として、国益を重視し、物怖じせず応接してきた父(今井武夫)に、何ものにも代えがたい悲しみを与えた。父は「軍人を辞め、坊主になろうか」と真剣に思い悩んだ。後年「宏の死が心の転機になった」という。遺された骨肉の悲嘆と、人命の尊さを知らされた。以後、「人情に国籍も身分の差もない。人の命の損なわれる事をわが身の悲しみとした」。宏の死が転機となって、軍人として、人血が流れずにすむヒューマニズムを父は第一の理想とした。後年、「自分の眼から、うろこを落とさせ、人間としての指針を与えてくれたのは、長男宏である」と言い、「宏の死が、多くの人の生に繋がるように、自分に努力を促した。宏は自分の志の中に生きている」と語っている。(長姉 今井俊子 「思い出す事々」昭和63年8月)

戦後 今井の北京武官時代につきあった 元朝日新聞 常安弘通 園田次郎 読売新聞 村上知行たち 新聞記者からの 今井宛の盧溝橋事件当時を思いやる 今井武夫宛の親密な手紙(翌年の自殺を想わせる村上知行からの年賀状)

今井武夫が「自分が最悪 責任をとって 腹を切ればいい」との覚悟で軍命令へ 抗命した行為

例 第141連隊 福山出陣の際の軍関係者への出陣公表 バターン戦争中の捕虜釈放

汪兆銘 陳公博たち 戦後漢奸となった対日中国協力者の人格を評価 追慕 今井には彼らが漢奸となったことへの贖罪の気持あり

5. 父の思い出 史料整理を通じて 感じたこと 今後

- ① 幼かった頃 私には 父が軍人だという意識は殆どなかった 普通の家庭と変わらなかったように思う 父は時間と健康管理にうるさかった。タバコを嫌った。
- ② 私は物心がついてから当初 父の履歴にあまり興味はなかった ただ軍歌 軍人の名前など 家人家庭の会話などから「門前の小僧」で かなり軍隊の知識をえた 戦後歴史教育で 日本陸軍は悪いことをしたとの歴史認識 若い頃 私は父が軍人であったことを 人に語らず 父が小学校のPTA会長を務めたこと 恥ずかしかった 私立武蔵中学に進学して日本史の島田俊彦先生との出会い 今は 父を誇りに思う 「生存中 父から もっと話を聞いておけばよかった」との後悔の念 今は長姉から父の思い出話を熱心に聴く。
- ③ 士官学校 陸大 軍隊教育のあり様 軍人の奇行 父の好き嫌いの人の判断
- ④ 近代歴史上の一般人物評価と 父母・親戚から 直接もしくは間接に聞いた人物評価との齟齬判明 (汪兆銘 陳公博 板垣征四郎 土肥原賢二 本間雅晴 牟田口廉也 長勇 影佐禎昭 和知鷹二 堀場一雄 辻政信などとの逸話)。
- ⑤ 今井と影佐禎昭中将との関係は1枚岩の関係ではないように思うが・・・。(両者の関係は微妙で 未だによくわからないところがある。 例 桐工作と汪兆銘工作の関係 影佐禎昭とアヘン販売)
- ⑥ 近現代史 日中歴史認識 特に 日中戦争への関心の芽生え 早稲田大学 劉傑教授の影響もあり 中文の歴史史料を読むため 中国語学習の開始(65歳からの手習い)
- ⑦ 今後 2年以内に 「今井武夫日記」(みすず書房)「今井武夫写真集」(彩流社)刊行 予定 父の戦後の日記にも価値があることが判明 今後出版を考えてみたい
- ⑧ 私は今後も 「今井武夫関連詳細年表」の作成を続けるつもり(終わりのない作業)
- ⑨ 父の叶わなかった夢の継承は 終生の責務 即ち 汪兆銘 陳公博たち 対日中国人協力者(漢奸・売国奴)の名誉回復(中国では殆ど知られていないが 彼らの潔い行動に対する「証言集」の発行等) (幕末の赤報隊 相楽総三の孫に倣う気持ち 汪兆銘の号「精衛」の由来 「螻蛄の斧」かもしれないが) 今後 生きている限り 本日を含めて それがどんなに難しくても 亡き父が望んでいた 「漢奸」汪兆銘の名誉を 少しでも 回復したいと願う。
- ⑩ 還暦後 何をすべきか分からなかった酔生夢死の不肖の息子に 私に 興味ある歴史研究テーマをあの世から送ってくれた父に感謝
- ⑪ 今は プライベートな話まで含めて こうして 父のことを 話べたの私が話すことができることは 息子として大変嬉しく こういう場を設けていただいたことに感謝

6. 述懐(汪兆銘 について)

戦中の 昭和18年 12月 影佐禎昭陸軍中将が ニューブリテン ラバウル島で副官の大庭春雄に口述筆記した(今井が 昭和23年 7月29日に 第一国立病院で 影佐禎昭中将から手交された) 遺書「曾走路我記」によると

「汪兆銘氏が その人格、識見、履歴などから見て、日本の傀儡たるに甘んずる人物であるか否かは、重慶政府(国民党 蔣介石政府)の人々が 最も知悉して居る筈である。自分(影佐禎昭)は 汪氏に接すること三年有余であるが、此の間、自分が発見し得た最大のものは、汪氏が偉大なる愛国者であると言ふことである」と述べている。

昭和50年12月6日に、発起人として 安岡正篤、日高新六郎、松本重治、沖野亦男、今井武夫の5人、世話役として、池田篤紀、岡田清、三石照雄と譚覚眞の4人が「中日和平運動殉難烈士慰霊集会」を東京都港区の西応寺で開催している。「慰霊集会開催趣意書」に曰く。

「過ぐる 日支事変に於いて、汪精衛・陳公博・曾仲鳴・林柏生の諸士を始めとして、それに協力せる王克敏・梁鴻志ら 多くの志士が、国父 孫文先生の中日合作の精神を継ぎ、中日和平運動に挺身した。不幸、日本の度重なる錯誤と失敗に因り、諸士はその士業に殉じ非命に斃れた。爾来三十有余年、已に恩讐を超えた歴史の流れの中に埋没し、忘却の彼方に遙かなものになったようである。

国民政府は台湾に遷り、共産党は北京に人民政府を創めたが、中日和平運動に殉じた諸烈士には墳墓だになく、その慰霊の消息すら知らない。当時、渦中に在ったわれらは、中日両民族が運命的に結ばれた存在であることは認識していたが、われらの営為が客観的にどれほど諸士を苦しめていたかを充分には知っていなかった。このことは死を前にして綴られた諸士の真実なる告白回想が語って余りある。今更に痛恨に堪えざるところである。

さもあらばあれ 逝 莫、時は過ぎて行く。すべては歴史の忘却の彼方に押しやられる。しかし、諸士と事を共にし、少なくとも志を同じくした、われら

にとって、諸士在天の霊を慰める義務があり、またそうせねば 心は安らがない。諸士は民族の紀律維持のために、或者は従容として自

ら命を絶ち、或者は判廷に憤慨能く所信を吐露し、或者は泰然として一語も発せず運命を甘受した。その凜冽たる最後の見事さはわれらの心魂に徹し、三十余年を過ぎて幽明境を異にする今に至り、一日と雖も忘れ得ないのである。

あたかも本年は、汪先生の三十三回忌に当る。これを機として、われら微衷の一端を披瀝し 殉難烈士の御霊を慰めたく、茲に集会を開く

に際し、諸賢の御賛同を得られれば幸甚の次第である。」

当日の「中日和平運動殉難烈士を祭る文」は以下の通りであった。

「維れ 時 昭和五十年十二月六日、謹んで時差の奠を以て、中日和平運動殉難烈士在天の英霊を祭る。諸賢は往年中日両国の間に戦禍起って、生民塗炭の苦に淪み、形成の推移は機に乗ずる共産党勢力の増大を招くを深憂し、敢て 衆議を排し、身を殺して、以て仁を成すの英断義挙に出たるも、此れに応ずべき日本当局の対策は深謀遠慮を欠き、日本幕末に於ける西郷・勝諸士の如き、人傑の経綸無かりしが故に、諸賢の庶幾せし 中日和正の達成を見るに至らず。却て 大東亜戦争となり、終に日本の敗戦に至れり。此に因て 諸賢は売国漢奸の汚名の下に、或は刑死、或は自決の非命に終りぬ。

夫れ、民族と国家の大義は儼乎たる紀律を存す。諸賢を裁断せし 国法は 枉ぐべからず。為政者の果決亦固より当に然るべし。然れども、諸賢と深識義交有りし両国の真朋は、多情多恨を奈何せん、就中 諸賢売国漢奸の汚名に於てをや。すでにして 汪兆銘先生逝きて三十三年、陳公博以下 諸先生、或は自決、或は刑死されてより三十年、漢楚の興亡 両つながら、空しきが如く、恩讐亦亡ぶも、今に至りても 猶 諸賢の墳墓だに無く、清酌時差の祭奠も聞く無きは、志士仁人の忍びざる所なり。吾曹偶々生を苟全して、今日に至る。中日両国道誼友好の大義は、今猶 古のごとく、永遠に変わる可からざるなり。諸賢の烈士 悲願亦、長く青史に銘記されん。茲に吾曹同志、諸賢在天の英霊を迎へ、心に 矢 辞を以てす。尚はくば 饗けよ。

中日和平運動殉難烈士 慰霊集会発起人・世話役並びに参会者一同

今井とともに 汪兆銘工作を行った 犬養健の娘 犬養道子は『ある歴史の娘』（中央公論新社 昭和55年）で 汪兆銘を 以下のよう

に評している。
「私は、和平のために 敢て 蔣（介石）さんを 振りすてて出馬し さんざ 日本から裏切られ もてあそばれ、あげくのはてに 寂しく死んで行った汪兆銘の愛国心を認めないなどと言うのではない。売国奴・カイライの汚名を長く歴史に書きこまれる可能性を十分に覚悟の上で、日々苦しむ民衆の救いのためにだけ、日本と手をにぎるべく 彼（汪兆銘）は重慶を脱出した。そのためにだけ、日本側和平同志ひとり「井沢検一砂糖商」（父 犬養健の偽名）が仏印ハイフォン沖に用意して待つ白い小船に迎えられ、すでにそれを知って「消すべく」重慶側スパイと刺客のいりみだれて待つ危険地区「上海」に乗りこんだのではなかったか。異常な明晰さで将来のすべての悲劇的可能性を見越しつつ、尚、やむにやまれず 汪さんをおつかぎ出した高（宗武）さんではなかったか。

一語でいえば、彼らは純粹でありすぎた。ロマンティストでありすぎた。しかし 有為転変の国の歴史と言う大きなものは、ロマンティストの夢を破り去るが、一個人の歴史、心の歴史というものは、メカニズムや計算のはるかかなたのロマンの理想を追うた「時代」によって「行動」によって豊かにされる。その時代と行動がむざんな挫折に終わったのちにも、「純粹であったあのとき、あの行為」は 心中に生きのびて、その人の生を輝きもて彩るのである。個人の歴史の観点から眺め見たとき、あの「工作時代」「和平時代」は、父（犬養健）にとっても、高（宗武）さんにとっても 悲劇の汪（兆銘）さんにとっても、また松本（重治）さんにとっても、忘れ得ぬ光の時刻、その思い出によって のちのちまでも、「あれでよかった」と満足し得る、満たされた一刻であろうと 私（犬養道子）にはいま、思われる。その工作の周辺にあって 一喜一憂し続けた母（犬養仲子）や私にとっても、あれは歴史を作るべく 生きた時代であった」と。

昭和63年、汪兆銘の元南京国民政府外交部事務官の譚覚眞と対談した評論家江藤淳が、今井武夫たちが生前言いたかったことを『諸君！9月号』で、次のように代弁している。

「逆風の中で、自分の正しいと信ずるもののために、命を賭する、日本人は古来、そういう人を非常に尊敬してきた。汪兆銘の姿は、理想は理想として美しい。政策は全部正しいかどうか分からない。それから、それを利用しようと思ひ、そこに賭けた日本人の思惑も、美しいものばかりではなかった。醜いものも多々あったかもしれない。

けれども、“人間の生き様”としては、汪兆銘は立派ですよ。それを日本人は、忘れちゃいけないと思う。汪兆銘、それから陳公博、その他、日本と合作しようとして志を立て、しかも志を得なかった人たちの事跡は、きちんと日本人が調べて、それを公正に記録しておかなければならない。これらの人の御霊に申しわけない。日本人は元来この美しさが分る筈なのですがね。ところがそれを今もちゃんとやっていない」と。

馬齒徒長（馬齢を重ねて） 私（今井貞夫）も最近ようやく 人生には 光の刻があると分かり始めた。人の評価は 「棺に蓋をしてから後に定まる」と言われている。漢奸（売国奴）扱いられている 汪兆銘一派の政治活動についての批判は多々ある。彼らの意図したことは、満足なかたちで 日本からも報いられず、実現しなかった。逆説的に言えば、悲運なればこそ、己の力を出しきって、必死に信ずるもののため、身命を賭ける人の姿の美しさを見ることができる。

和平交渉にはリスクが伴う。主戦論者からは 和平主張者は「軟弱者」と謗られる。時、利あらず、無念の想いで散り、漢奸として墳墓は爆破されても、息を引き取る間際、国事をその人に信頼して託す股肱、同じ主義に基づきながら、その行動の仕方に異を唱えても、先輩の困窮時だからこそ、やむなく、不変の友情で犬馬の労に尽くさんと侠の心で馳せ参じる後輩、また、その人死してさえ後も、生前の思想・信念を共鳴・追慕し、わが身にふりかかる不利を厭わず、命さえ呈する心友を有する君、汪兆銘が、果たしてこの世の失敗者と言い得よう

か。

父 今井武夫は 知り合ってから その死まで五年有余。何回 どこまで肝胆あい照らして話し合えたかは分らないが、その人柄に感嘆してやまなかった汪兆銘。その汪兆銘に全幅の信頼をもつて国事を託し、息を引き取った股肱・曾仲鳴、汪と春秋時代の斉の管仲と鮑叔牙のごとき交わりをなした後輩 陳公博。汪兆銘の同志でもある烈婦 汪夫人・陳璧君……。

汪兆銘と出会って その人間に傾倒し、日中間の要求の板ばさみとなりながら、約を果たすべく 命を削った盟友・影佐禎昭。人生意気に感じて、影佐を蔭でサポートし 華やかな表に出ることはなかったが、昭和13年12月 汪兆銘の重慶脱出成功の報を泣いて喜び 腸チフスを患い 失意のうちに上海から 日本に帰る船上の松本重治に対する電報「アジアの黎明 至らんとす 大兄の努力に感謝す」を送った情熱家 伊藤芳男……。

良心の満足のみを この世で唯一確実な報酬と信じ、信義を重んじ、己の命を犠牲にして生きた人たちの 壮烈な生き方を、私は 今後とも 生命ある限り 伝えたいと願う。

7. 最後に

時間があれば 添付参考 「その時 今井武夫は」に少し触れたい。

三好章先生 広中一成君ほか 研究ご関係者 前述今井武夫関係史料で抜けていると思われる重要史料 コメントあれば 補足ください。本日話した内容以外のことでも 「今井武夫」に関する質問なら 歓迎いたします。

以上

参考 「その時 今井武夫は」

(1) 盧溝橋事件時の停戦交渉

昭和10年(12月18日)今井は 北平大使館付 駐在武官補佐官(北京武官)として北京(当時「北平」)に赴任

中国情勢報告 中国側意見の取次ぎ代弁(是々非々) 中国側要人(交渉相手の秦徳純北平市長など)と親交
その間に中国側から 情報と信用獲得

昭和12年 盧溝橋事件勃発前の(昭和12年 7月 7日) 3件のミステリー 体験

ミステリー 1 6月27日

西本願寺前門主 大谷光瑞伯爵に会い 北平での日中衝突についての不穏な予測を聞く

ミステリー 2 7月 3日

河北省主席兼第29軍第37師長兼務 馮治安中將に誘われて 保定に同行 その折 馮から盧溝橋での6月29日の日本軍の実弾発砲
不法事件を聞く

ミステリー 3 7月 6日

陳子庚(元國務總理 靳雲鵬の秘書長)の自宅に夕食に招かれる そこへ冀北保安隊司令石友三中將の突然の訪問あり 事件前日なのに盧
溝橋での衝突事件を聞く

盧溝橋事件

7月 7日 午後10時40分近く北平の西南にある盧溝橋で演習中の第八中隊への何者かの実包射撃 清水節郎第八中隊長→ 一木義
直大隊長 → 牟田口廉也連隊長に報告 (河辺正三旅団長 不在)

7月 8日 午前0時 週番指令に今井(北京武官)は起こされ 河野又四郎連隊副官から 事件発生電話連絡を受ける 午前3時 第一
報を各方面に発信 午前3時25分頃 第二の銃声 午前4時 第二報を発信 午前4時20分 第三の発砲を受ける午前5時 各誌記
者を集めて武官庭で記者会見 午前6時 第三報を発信 今井は第29軍副軍長 秦徳純(北平市長) 第132師長 張登禹 冀察政務委
員 張允榮の3人と秦徳純の自宅で会見 とりあえず 事件不拡大で両国意見が一致 しかし その後も現場で小競り合いが続く

7月10日 妻今井きみ子宛 遺書 「予ハ貴下ニ対シ満腔ノ感謝ト敬意ヲ表ス 予亡キ後ハ其意図スル儘ニ行動セラレンカ其ハ予ノ意思
ニ合致スルナラン 但シ如何ナル場合ト雖モ祖先ノ祭司ト幼児ノ育成ニ心セラレ度 児長セハ予生前ノ日常生活ヲ伝へ彼等十五才以後ノ
希望スル途ヲ進マシメラレ度 昭和12年7月10日 きみ子殿 今井武夫 花押」 昭和16年12月24日付上書きあり。「本日右ヲ
検シ 之ヲ改ムルモノナシ 今井武夫」

7月11日 中国側との交渉はかどらず 北平から天津に帰ろうとする橋本群支那駐屯軍(天津軍)参謀長の交渉許可を今井は得て 単身
(午前11時半頃)冀察政務委員 張允榮宅で中国側要人 齊燮元 張允榮 林耕宇の3人と会見 今井の独断で 盧溝橋からの日中両軍
同時撤退を提案 齊燮元將軍 同意 現地停戦協定をとりまとめる (午後2時)南苑飛行場から天津に帰ろうとしている橋本群参謀長に
報告し 現地停戦協定調印の認可を受け 北平特務機関室に戻る しかしそこに 専田盛寿天津軍参謀(陸士同期)から電話で「内地で派
兵を決定したから 現地停戦交渉をとりやめろ」との電話あり 今井は既に約束したことであるからと拒否 直接松井太久郎北平特務機
関長に、また天津に帰った橋本群参謀長の再許可も電話でとり 協定案の字句修正のうえ(午後6時)松井機関長と張允榮宅に赴き(午後8
時) 停戦協定調印を終わり(9時)解散 口頭で現地停戦協定が成立して夜には調印される予定であるとの連絡を連絡したにもかかわらず
同日近衛文麿内閣が閣議で出兵決定し発表 中国側を刺激させる 穏健な田代皖一郎支那駐屯軍(天津軍司令官)が危篤で 不在も影
響し 事変は拡大

盧溝橋で最初の銃弾を発射したのは誰か? 昭和の謎 日本人説 中国人説(「共産党 劉少奇説」など) ソ連説など ただし 今井は
調査の結果 日本軍ではないと主張 晩年は 火事に譬えるなら意図的な“放火説”でなく“失火説”が強いと考えていた。

(2) 日中和平工作

昭和13年 (1月)近衛文麿首相 声明「蔣介石を相手とせず」

(2月)中国 亜州科長の董道寧 民間人 松本重治 西義顕 伊藤芳男の斡旋で来日 影佐禎昭支那課長と接触

(6月)董道寧の上司 亜州局長 高宗武 影佐禎昭支那課長と箱根で 2回面談

(10月~)今井武夫 松本重治 西義顕 伊藤芳男らと中国側 高宗武らとの接触

影佐禎昭少将らと共に 国民党副総裁だった汪兆銘工作

(11月20日)上海 重光堂会談(日本側:影佐禎昭 今井武夫 中国側:高宗武 梅思平 周陸祥)

(12月18日)汪兆銘 飛行機で重慶を脱出 昆明に到着 汪兆銘 蔣介石への別れの手紙 「君為其易 我任其難」(君は
安易な道を行け 我は苦難の道を行く)(上坂冬子『我は苦難の道を行く』(講談社)

(12月29日)松本重治 上海から日本に帰る船上で 伊藤芳男から 汪兆銘の重慶脱出成功を知らせる電報「アジアの黎
明至らんとす 大兄の努力に感謝す」を受け取り 感激

昭和15年 (3月30日)南京に 汪兆銘政権 成立

(2月~9月)桐工作(蔣介石の義弟と称する宋子良を通じた 対重慶工作) 結局この工作は失敗

(10月 1日)東条英機陸相 支那派遣軍による和平工作活動 禁止令

昭和20年 (4月18日)4年半近く続いた支那派遣軍の和平工作活動禁止令の解禁

(7月9日~10日)今井は危険を冒して 河南省新站集汜東区司令部での何柱国上將との和平会談
終戦寸前で 時期的に手遅れに終わる